難治性の顔面の皮疹に葛根紅花湯が 著効した 3 症例

大塚 静英^a 及川 哲郎^a 望月 良子^a
早崎 知幸^a 小曾戸 洋^a 伊藤 剛^a
村主 明彦^a 花輪 壽彦^{ab}

a 北里大学東洋医学総合研究所, 東京, 〒108-8642 東京都港区白金5-9-1

b 北里大学大学院医療系研究科, 神奈川, 〒228-8555 相模原市北里1-15-1

Three Cases of Refractory Facial Eruption Successfully Treated with Kakkonkokato

Shizue OTSUKA^a Tetsuro OIKAWA^a Yoshiko MOCHIZUKI^a
Tomoyuki HAYASAKI^a Hiroshi KOSOTO^a Go ITO^a
Akihiko MURANUSHI^a Toshihiko HANAWA^{ab}

a Oriental Medicine Research Center, Kitasato University, 5-9-1 Shirokane, Minato-ku, Tokyo 108-8642, Japan

b Doctoral Program of Medical Science, Kitasato University Graduate School, 1-15-1 Kitasato, Sagami-hara-city, Kanagawa 228-8555, Japan

Abstract

Kakkonkokato is a special formula used for the treatment of rosacea-like dermatitis lesions in the nasal region, but very few cases treated with this formulation have been reported so far. Here, we report three patients with refractory facial eruptions of rosacea-like dermatitis treated successfully with kakkonkokato. Case 1 was a 39-year-old man who presented with a 15-year history of rosacea-like dermatitis lesions in the nasal region. After 3 weeks' treatment with kakkonkokato, a marked improvement of his lesions was seen, with disappearance of the redness of his face. Case 2 was a 56-year-old woman who presented with a prolonged history of itchy eruptions around her mouth and nasal region. After 8 weeks' treatment with kakkonkokato, an almost complete disappearance of her eruptions was observed. Case 3 was a 26-year-old woman who presented with atopic dermatitis and intractable erythema under her nose, which was refractory to treatment with steroid ointments and antiallergic agents. After 2 months' treatment with kakkonkokato, her erythema completely resolved, along with improvement of the systemic lesions of atopic dermatitis. The observations in these three cases suggest that kakkonkokato may be a useful formula for the treatment of not only rosacea-like dermatitis in the nasal region, but also of refractory facial eruptions of other causes.

Key words : kakkonkokato, acne rosacea, rosacea-like dermatitis, atopic dermatitis

要旨

難治性の顔面の皮疹に葛根紅花湯が著効した 3 症例を経験したので報告する。症例 1 は 39 歳男性。20 歳頃より鼻に局限して丘疹が出現し、以後、塩酸ミノサイクリンの内服にて寛解、増悪を繰り返し、いわゆる酒齧鼻となったため、2007 年 5 月に当研究所を受診した。葛根紅花湯（大黄 0.3g）を服用したところ、3 週間後、鼻全体の発赤が軽減し、丘疹も減少、額・頬部の発赤も消失した。症例 2 は、56 歳女性。鼻、口周囲を中心とした瘙痒感を伴う皮疹にて 2006 年 10 月に当研究所を受診した。ステロイド外用剤にて軽減するものの中止すると増悪を繰り返していたことより、酒齧様皮膚炎と診断した。葛根紅花湯（甘草 0.8g、去大黄）を服用し、ステロイド外用剤は同時に中止したところ、3 週間後、全体的に紅斑は鼻と口周囲のみとなり、8 週間後には症状はほぼ消失した。症例 3 は、26 歳女性。鼻口唇部の紅斑、アトピー性皮膚炎にて当研究所を受診した。黄連解毒湯にて全体的には症状が軽減するも、鼻口唇部の紅斑は不変であったため、葛根紅花湯（大黄 1g）に転方したところ、2 カ月後、鼻口唇部の紅斑は消失し、6 カ月後には鼻口唇部の色素沈着がわずかに残るのみとなった。葛根紅花湯は、従来、いわゆる酒齧鼻に用いられてきたが、鼻だけでなく、顔面・鼻周囲の皮疹にも応用が可能であると考えられた。

キーワード : 葛根紅花湯, 酒齧鼻, 酒齧様皮膚炎, アトピー性皮膚炎

図 1-a

症例 1 葛根紅花湯服用前

図 1-b

症例 1 葛根紅花湯服用 3 週間後

緒言

葛根紅花湯は有持桂里が『稿本方輿輳』¹⁾に記し、従来、いわゆる酒齋鼻に用いられてきた処方²⁾であるが、その治験例は数少ない。緒方の報告した「ニキビに当帰芍薬散加方、次で(残った顔面の赤味に)葛根紅花湯」、「洗顔後、鼻尖部が赤くなると訴える婦人に葛根紅花湯」、「酒齋に葛根紅花湯」の3例の症例報告のみである^{3)~5)}。

今回、我々は、葛根紅花湯が、いわゆる酒齋鼻、酒齋様皮膚炎、アトピー性皮膚炎などの顔面の皮疹に著効した3例を経験したので報告する。

症例 1：39歳、男性。

主訴：鼻の丘疹と発赤腫脹。

現病歴：20歳頃より鼻に吹き出物が出来たため、15年来断続的に塩酸ミノサイクリンを服用していた。最近では、月に2度程度、増悪時のみ塩酸ミノサイクリンを服用し、5日程度で丘疹は消退していた。漢方薬局にて煎じ薬(詳細不明)を半年服用するも改善しないため、2007年5月に当研究所を受診した。

飲酒歴：なし。

身体所見：身長175cm、体重61kg、血圧120/70 mmHg。

皮膚所見：鼻に局限した丘疹を多数認め、鼻全体が発赤、腫脹していた(図1-a)。痒痒感はなかった。額・頬部に発赤を認めた。

漢方所見：舌は、乾湿中間、淡紅、薄い白苔を認

め、脈は弦、腹診では、腹力は中等度で、両側の胸脇苦満、心下痞鞭、腹直筋攣急、小腹不仁、臍下に正中芯、両側臍傍部の圧痛、軽度の回盲・S状部の圧痛を認めた。

経過：初診時、臨床所見から、いわゆる酒齋鼻と診断し、葛根紅花湯(大黄0.3g)を処方した。服用3週間後には、鼻全体の発赤が軽減、丘疹も減少し、額・頬部の発赤は消失した(図1-b)。

症例 2：56歳、女性。

主訴：鼻、口周囲を中心とした痒痒感を伴う皮疹。

現病歴：2005年10月、顔面に散在性の紅斑と丘疹が出現し、近医にて湿疹と口唇ヘルペスと診断された。アシクロビル、ステロイド外用剤(詳細不明)の処方を受けたが、口唇ヘルペスが軽快した後も湿疹は完治には至らなかった。湿疹が悪化するたびにステロイド外用剤を使用し、さらにセレスタミン®(マレイン酸クロルフェニラミンとベタメタゾンの合剤)の内服も併用したが、湿疹は一時的に軽減するものの、ステロイド外用剤を中止するとすぐに増悪を繰り返していた。他院で某社の十味敗毒湯エキス、十全大補湯エキスを服用するも改善しないため、2006年10月に当研究所を受診した。

飲酒歴：なし。

身体所見：身長153cm、体重56kg、血圧148/100 mmHg。

図 2-a

症例 2 葛根紅花湯服用前

図 2-b

症例 2 葛根紅花湯服用 8 週間後

図 3-a

症例 3 葛根紅花湯服用前

図 3-b

症例 3 葛根紅花湯服用 2 カ月後

図 3-c

症例 3 葛根紅花湯服用 6 カ月後

皮膚所見：鼻，口周囲を中心とした瘙痒感を伴う紅斑・丘疹が散在している。鼻頭部に点状の毛細血管拡張を伴う淡紅色斑と，小豆大の紅斑を認めた（図 2-a）。気温の上昇時や発汗時に瘙痒感が増強することであった。

漢方所見：舌は，湿，薄い白苔を認め，脈は沈，腹診では，腹力は中等度，両側の胸脇苦満，軽度の心下痞鞭，腹直筋攣急，臍傍・回盲・S 状部の圧痛を認めた。

経過：初診時，経過よりステロイド外用剤の長期使用に伴う酒齎様皮膚炎と診断し，葛根紅花湯（甘草 0.8g，去大黃）を処方した。ステロイド外用剤は漢方服用開始と同時に中止した。3 週間後，丘疹は消失し，紅斑は鼻と口周囲のみとなり，8 週間後に

は，紅斑もほぼ消失した（図 2-b）。

症例 3：26 歳，女性。

主訴：鼻口唇部の紅斑。

現病歴：小児期より軽度のアトピー性皮膚炎があり，成人後も少し紅斑が出現する程度であった。2006 年 5 月より，鼻の下，首，背中に強い瘙痒感を伴う紅斑が出現。皮膚科を受診し，塩酸オロパタジンの内服，ステロイド外用剤（詳細不明）を使用し軽減したが十分な改善がみられず，2006 年 6 月に当研究所を受診した。

飲酒歴：ビール 1 本を週 3 回。

身体所見：身長 171cm，体重 70kg，血圧 110/60 mmHg。

皮膚所見：全身の皮膚は乾燥し、鼻の下、首、背中に強い瘙痒感を伴う紅斑、特に鼻口唇部に浸潤性紅斑を認めた。

漢方所見：舌は、乾湿中間、淡紅色で無苔であり、脈は沈、腹診では、腹力は中等度、両側に軽度の胸脇苦満、腹直筋攣急を認めた。

経過：初診時、黄連解毒湯を処方した。2カ月後、背中の強い瘙痒感を伴う紅斑は改善し、4カ月後、全体的に症状は軽減した。便秘のため4カ月目以降大黄1gを追加した。しかし、6カ月経過後も鼻口唇部の浸潤性紅斑は改善せず（図3-a）、ステロイド外用剤を中止すると増悪するため、葛根紅花湯（大黄1g）に転方した。転方2カ月後、鼻口唇部の浸潤性紅斑は消失し、色素沈着のみとなり、瘙痒感も消失した（図3-b）。変方6カ月後には鼻口唇部の色素沈着がわずかに残るのみとなった（図3-c）。

考察

葛根紅花湯の原典は、有持桂里（1758-1835）が記した『稿本方輿輳』（第12・鼻）で、「葛根紅花湯は酒查鼻のはげしき者にて重きものは腫れあがる者なり。黄連解毒は腫れるに及ばずして軽きものなり。葛根紅花は鼻疣が出来て癩の如くに鼻になる者なり。それには、黄連解毒はちと届き兼ねるなり。酒查鼻は自ら痛きことはなきものなり。痒みはあるものなり。」¹⁾とある。その構成生薬は、大黄、黄連、山梔子、葛根、芍薬、生地黄、紅花、甘草で、北里大学東洋医学総合研究所では、葛根・芍薬・地黄各3g、黄連・山梔子・紅花各1.5g、甘草1g、大黄（適量）を用いており⁶⁾、治酒查鼻方に葛根を加えたものである。

治酒查鼻方は、『勿誤藥室方函口訣』に、「此の方は三黄瀉心湯に加味したる者にて、総じて面部の病に効あり。酒查鼻に限るべからず。若し瘡膿ある者、大弓黄湯（治頭瘡一方）に宜し。清上防風湯は二湯より病勢緩なる処に用ゆ。」⁷⁾とある。治酒查鼻方の構成生薬の薬効は、大黄、黄連、山梔子は清熱作用、芍薬、地黄は四物湯加減で血の道を滑らかにし、紅花には強い駆瘀血作用がある。葛根紅花湯は治酒查鼻方に葛根が加わるため、前述の薬効を顔面に引き上げる方意を持つものと考えられる。

葛根については、岡本一抱（1655-1716）の記した『和語本草綱目』に、「葛根は胃熱を解きて渴を

止む。酒毒を消す。肌熱を解て汗を發し、痘瘡、斑疹出難きを發し、陽明の頭痛を治する聖藥なり。」⁸⁾とある。つまり、葛根は、鼻症状の原因となる胃熱を去り、津液を増やして口渴を軽減し、酒毒を消し、皮膚の熱を去って、汗を出し、痘瘡、斑疹を皮膚から出し尽くす作用がある。葛根紅花湯は、治酒查鼻方の清熱および駆瘀血作用に加え、葛根が鼻の症状をきたす胃熱を清する薬能をもつために、いわゆる酒齧鼻に有効な処方とされるものと考えられる。

今回提示した3例のうち、1例目はいわゆる酒齧鼻と考えられる。緒方の報告によると、十分な効果が得られるまで4カ月から1年程度の服用が必要であったが、本例では3週間後に明らかな皮疹の改善が認められた。後述の2例も、8週間後には著明な皮疹の改善が得られており、葛根紅花湯の効果は比較的速やかに現れると考えられる。2例目は酒齧様皮膚炎だが、炎症所見が強く、消炎作用をもつ生薬を多く含む本方が、特に有効であったと考えられる。通常みられるステロイド外用剤の中断によるリバウンドもみられず、速やかな軽快をみた。3例目はアトピー性皮膚炎であり酒齧ではないが、鼻口唇部に炎症を繰り返して形成された紅斑があり、その酒齧にも似た、厚みを持った所見を参考に本方を選択したところ著効を呈した。本例の罹患部位は瘀血を伴うと考えられ、駆瘀血作用のある葛根紅花湯が有用なのではないかと推察される。

葛根紅花湯は、従来、「酒查鼻専門の薬方である」²⁾とされ、実際そのように運用されてきたと思われるが、より広く顔面の難治性湿疹などに応用が可能であると考え、若干の文献的考察を加えて報告した。

結語

鼻・口周囲を中心とした顔面の皮疹に対して、その部位や局所的な炎症所見、瘀血所見を参考に葛根紅花湯を処方し、著効を得た3症例を経験した。葛根紅花湯は、従来、いわゆる酒齧鼻に対して用いられてきたが、鼻だけでなく、顔面・鼻周囲の皮疹にも応用が可能な処方であると考えられた。今後症例を集積し、より詳細な葛根紅花湯の使用目標について検討してゆきたい。

附記 顔写真の掲載に関しては、患者からの書面による承諾を得ている。

本稿は第58回日本東洋医学会総会（広島・2007年）

において報告した。

本稿で投与した，葛根紅花湯の構成と生薬集散地は以下の通りである。

葛根紅花湯：葛根（3.0g，四川省），芍薬（3.0g，奈良県），地黄（3.0g，河南省），黄連（1.5g，岐阜県），山梔子（1.5g，江西省），紅花（1.5g，四川省），炙甘草（1.0g，内蒙古），大黄（適宜，四川省）

文献

- 1) 有持桂里：「稿本」方輿輶，江戸後期写，巻15，鼻，28丁裏，燎原書房影印（1973）
- 2) 矢数道明：臨床応用漢方処方解説，増補改訂版，646，創元社（1981）
- 3) 緒方玄芳：ニキビに当帰芍薬散加方，次で葛根紅花湯，漢方診療おぼえ書（48），漢方の臨床，**27**，482-483（1980）
- 4) 緒方玄芳：鼻が赤くなると訴える婦人，漢方診療おぼえ書（78），漢方の臨床，**30**，91-92（1983）
- 5) 緒方玄芳：酒齧に葛根紅花湯，漢方診療おぼえ書（136），漢方の臨床，298-299（1992）
- 6) 花輪壽彦監修：北里研究所東洋医学総合研究所漢方処方集，52，医聖社（2003）
- 7) 浅田宗伯：勿誤藥室方函口訣，近世漢方医学書集96影印，67，名著出版（1982）
- 8) 岡本一抱：和語本草綱目（1），近世漢方医学書集成7影印，491-492，名著出版（1979）